



鳳凰の嘴の鋭し青嵐
原爆死者ひとりひとりにお風入
蛇を見し貌じやぶじやぶと洗はねば
何もかも無からはじまる蛞蝓
ふうと気を許す青空田を植うる
蛸^{ひおじし}を払ひ空腹覚えけり
芋の花地中は智慧の溜め所
日盛に羽根干してゐる鳥の顔
泉鳴る麒麟が臉とちるたび
騒がしき大樹の匂ひ夏鳥来
女性鵜匠指はピアノを弾くごとく
青梅を無性に齧りたき日暮
大西日崇むるやうに群鴉
*
花石榴へレンケラーの忌を修す
火の山に對峙してをり蝮草

栗原利代子
佐藤健
岩井かりん
倉科繁登
野口美智子
原あや
岩間嘉一
太田薫
滝澤あや
柿谷有史
小林亘
中岡草人
大倉みつ子
有手勉
清水逍径

川音の高きより来る貴船朱夏
掌に一字起こして青嵐
兎波だば船出せねやませだべ
滝壺の水に筋力揉み合へる
甚平や新しきものもう買わぬ
滝風に長^ナ久^ウ生^{ライ}容^ロの笛の音
朴散華即ち如何に朴下亭
千年の泉の冷えの下る喉
朝焼や「もつとあしたはできるようにするから」と
眼球を刻む夕立鉄格子
紫陽花や念力送る参観日
砂浜の海月の欠片ひとりごと
雷鳴や学生運動無き時代
本能の根元を洗う瀑布かな
たたら場は灼熱の炎よ梅雨盛り

小口洋子
飯田六斗
許勢元貞
小熊里利
遠藤君子
今野晶子
塚原白里
関位順平
福島留美子
曦終永
竹内健
秋山格雄
島形英美子
竹岡みち子
土屋敏弘

岳半世紀へ・拓くことば

八月 468

宮坂 静生

はじめに。赤城はなつかしい山だと書かれたのは、『三太郎の日記』（阿部次郎）であった。その手で浅間山はいつ見ても心温まる山だと思う。軽井沢での大会の総括記事と記念写真集が今月始めにお手元にとどく。当日の情景をもう一度思い浮かべ愉しんでほしい。

明快に一句を描く力強さ

鳳凰の嘴の鋭し青嵐 栗原利代子

鳳凰は想像上の鳥なので、「嘴の鋭し」も寺の天井画などに描かれた肢体への言及であろう。ぎよろ目に鋭い嘴。彩色あざやかなさまが的確に捉えられている。季語の青嵐が完璧だ。力強い。上句の十二音全体へよく響いている。作者の気持の張りが感じられ、対象に迫る熱意が伝わる。

蛇を見し貌じやぶじやぶと洗はねば 岩井かりん

蛇嫌いなのである。あゝ嫌だ嫌だと、貌に水をじやぶじやぶ掛けて洗う。その間、蛇の残像からのがれる。完全に消えたわけではないが、気分は楽になった。仮定の言い方なので実際に洗ったものかどうかわからないが、ことばだけでも、

そんな場面をつくり出す描写力はなかなかのもの。

何もかも無からはじまる蛞蝓 倉科 繁登

蛞蝓嫌いなのか、蛞蝓に塩を掛けて蛞蝓を消す。子どもの頃、そんないたずらをした。蛞蝓の身にとってはあわれ。上句のフレーズは強烈な思想だ。「無」を実感できるのは、手近ではこんないたずらから。佳吟と思う。

ふうと気を許す青空田を植うる 野口美智子

「ふうと気を許す」は見事な着想。田植さなかの息抜きの場を捉えたものか。腰を伸ばして見上げた青空のやさしさ。ごくらうさんとささやいてくれる。作者の表現心理が深くなっている。なかなかこんな巧みな句は作れない。秀句。

蛸を払ひ空腹覚えけり 原 あや

蛸はかげろう。こゝは目まとい（糠蚊）の類か。かげろうは払うほどしつこく纏いつくものではない。昼近い頃の空腹感も、草むしりなどの場を想像し、なかなか実感がある。

芋の花地中は智慧の溜め所 岩間 嘉一

泉鳴る麒麟が臉とぢるたび 滝澤 あや

芸術家の一句。あやさんは画家。ことばで見事に絵を描いている。マチスカ。日本の画家で例示したいのだが、この麒麟の瞑想は静謐そのもの。童画風な巧みな作。

騒がしき大樹の匂ひ夏鳥来 柿谷 有史

「大樹の匂ひ」にはっとした。作者は視覚が不自由。聴覚、嗅覚がいのち。その両感覚の働かせ方が鋭い。夏の鳥が来て夏の到来を「匂ひ」で捉えた。視覚が専らの私は聴覚、嗅覚はほとんど生かし得ないことを知り、教えられた。

女性鵜匠指はピアノを弾くごとく 小林 亘

女性の鵜匠のあざやかな指さばきを「ピアノを弾く」ようにだと捉える。黒い鍵盤上に踊る指の動きへの連想が知的。そこに女性鵜匠の姿が見えるようだ。鵜の動きに従うには女性の柔和さが巧みに適応するのであろう。

青梅を無性に齧りたき日暮 中岡 草人

幼児に戻ったような原始感覚に動かされる。妊産婦でなくとも、からだ欲して青梅を齧りたいという気持になることがある。日暮は、眠っていた感覚が魔物によって目覚めさせられる時刻。草人さんも視覚が不自由なので、青梅を齧りたいというからだ感覚は鋭いのであろう。

芋（里芋）の花から地中を想像するのは当然であるが、このような句を一つはまとめておきたいという作者の気遣いがよくわかる。新しみのある発見ではないが、一步一步納得しながら描写力をつけてゆく作者のまじめな生き方に好感をもつ。

日盛に羽根干してゐる鳥の顔 太田 薫

真夏の暑さに耐えている鳥の姿態を「羽根干してゐる」とはやさしいいい方で、よく鳥の気持を汲みとっている。長年、生徒の気持に寄り添ってきた学校の先生の感じ方だ。上手になりすぎるとなかなかこの素朴さは出せない。鳥への愛情表現であろう。

今月の秀句

原爆死者ひとりひとりにお風入 佐藤 健

寺の経文などの虫干し、曝涼をお風入という。原爆死没者名簿ひとりひとりに供養の思い入れをして風を入れた。作者の率直な気持が伝わる。八月は六日も九日も毎年、新たな感慨をもつ。七十余年むかしの歴史のかなたのことではない。原爆の死者も戦時の空爆の死者も沖縄の死者も、お風入を待つ者ばかり。生きている者も供養の手がまわらないほどだ。

拓くことば ④3 自句寸言の「梅雨蝸」

萱山の梅雨蝸が灯を配り 平成三年
「岳」(平成三年九月号)所載。七月に井波から五箇山へ。「夏炬端こきりこ踊る少女が来」が同時作。五箇山の民宿「勇助」泊。向いの萱山で夕方蝸が鳴き出す。

「梅雨蝸」と捉えて詠む。以後、盛んに詠まれるが、私が初めて用いたものか。秋の季語の蝸が飛越山中では梅雨の頃から鳴き出す。『火に椿』所収。

大学のはつか高みに蟬の国 平成三年

「岳」(平成三年十月号)所載。「宮地良彦先生、信州大学学長に」と前書。理学部から只木良也先生などが担ぎ出し、少数学部では珍しく学長に就かれた。人望が篤い。進取の精神に富み、明快、庶民派。大学構内の櫛や槐の高みで蟬が鳴いていた。わずかに市街地の喧騒よりも高み。そこに宮地学長の姿勢があり、親しまれた。

『火に椿』所収。

火に椿投じて杜国忌を修す 平成四年

「俳句研究」(平成四年五月号)に「火に椿」三十一句。三河田原での「紅梅や華山幽居に糸車」も同時作。取材小旅。三月、徳子、淳子を伴い伊良湖行。潮音寺に寄り、坪井杜国の墓詣。住持の配慮で、芭蕉・杜国・越人

三人歓談図(軸)を見せて貰う。シーサイド伊良湖泊。炬に椿が活けてあったが、着想は火に投げ入れた。橋本多佳子のようにだと思いつながら。芭蕉の念者杜国は元禄三年三月二十日没。芭蕉の慟哭は『嵯峨日記』に痛切。

『火に椿』所収。

蠅帳をなつかしがりて蠅とまる 平成四年

「岳」(平成四年九月号)所載。秋山郷詠。「信濃から越後の海へ虫送」も同時作。奥信濃の秘境秋山郷での民宿泊。食卓にするテーブルに蠅帳があった。蠅がいた。きょとんと蠅帳に止まっていた。上田五千石がいたく憂えてくれたことが記憶にある。『火に椿』所収。

きらめくは枯るる兆しや山帰来 平成四年

「鷹」(平成五年二月号)所載。「上高地」と前書。秋だった。山帰来の葉がてかてか光っている。山帰来の臨終かなと、半ば冗談、半ば本気で人の死を思った。『火に椿』所収。

若潮の戸田の入江に風邪家族 平成五年

「岳」(平成五年二月号)所載。伝手があり、修善寺の会社保養所で越年。四泊したか。魚は絶品、しかし、徳子が風邪。遊学先の東京から来た長男、長女にもうつってさんざん。凡句だが思い出のために。珍しいことは似合わない。『火に椿』所収。

大西日崇むるやうに群鴉 大倉みつ子

大西日に対する群鴉のそれとなき動きを「崇むるやうに」とみたのが巧み。鴉の知恵はそろそろしい。ましてや群をなしている鴉という、単独でない捉え方により怖さが増加された。素朴な感覚がよく生かされた句と思う。

他に雪嶺集・前山集からの推薦候補作を掲げる。

姥百合はくわつと海鳴り聴く容	清水 道徑
鉤裂きの衣繕へぬ沖繩忌	市川美八子
青葉山われは煙のやうなもの	小熊 里利
滝壺に落ちる瞬時を水知らず	今井 愛子
子かまきり煙のやうな触角よ	塩原 英子
花菖蒲夢の根つこを鍛へけり	荻原 昭廣
黒南風や眩暈に手足挽ぎ取られ	宮地 和子

火山と蝨草との対照、それを対峙とは

火の山に對峙してをり蝨草 清水 道徑

対峙とは、同格の力で向き合うこと。たとえば浅間山のよいう火の山と蝨草とが張り合うように向い合う。両者の関わりを対峙と捉えたところに詩情ありや。はじめから頭を下げる敗者の風情の蝨草は、その名の通り、なかなかの剛のもの。

しおらしい花ではない。なにを考えているのか内情は掴み難い。マグマを秘めた火の山と勝負になると、私も共感する。対峙という哲学的な硬い方に対応しいではないか。

川音の高きより来る貴船朱夏 小口 洋子

貴船水分神社は京都の水の神を祀る。祈雨や止雨に靈驗あらたかな神。貴船川の水音はその高みから来るとは、なるほどと合点。そこに盛夏を感じ、貴船を讚える気になった。京の照りつける夏ではない。はるばる来て貴船の夏に気付く。双が丘に住み、京の夏のきびしい暑さの体験から家のつくりは夏をむねとすべしと言った兼好さんを意識した句とみる。そうはいえ、京の奥、貴船の朱夏は格別よというのだ。

掌に一字起こして青嵐 飯田 六斗

涼という字を一つのひらに書いた。それだけでも涼しい。青嵐という、夏に入った証の青葉を渡る強めの風。なんでも好きな一字を書いたというのではない。青嵐との照応を考えれば上述のごとし。俳味あるいい方だ。

兎波だば船出せねやませだべ 許勢 元貞

知床ウトロの船長ことば「兎波なので船を出せない。やませだよ」という。みちのくに冷害をもたらすやませだよと言ったもの。この一句を耳にとめるだけでも、俳句の領域がひろがり、感覚がいい。

滝壺の水に筋力揉み合へる 小熊 里利

滝壺に落下した水に「筋力」を感じる。いい感覚だ。大陸的な強さがどこかに秘められている。

甚平や新しきものもう買わぬ 遠藤 君子

甚平は着古してお尻のあたりがすこし薄い。それでもいいや、これで今年の夏はすげえと、がんばるご老体。これまでの浪費ぐせ、衝動買いをいましているが、どこかあやういところがおかしい。

滝風に長久生容の笛の音 今野 晶子

〈滝風にチョウウクライロと笛鳴れり〉(榎 正子)もある。象潟の小滝地区に国の重要文化財に指定されている「小滝のチョウウクライロ舞」を秋田勢が見に行ったときの囁目吟のようだ。起源は天安元年(八五九)という古いものらしい。延命長寿の七つの舞があり、笛の音が「長久生容」と聞こえるという。こじつけにしても、いつかそんな風に聞こえるようになる。笛の音には人の願いがこめられている。地貌への関心とは故人の精神、願いに気付くことであり、それにより今日のわれわれとつながるのであらう。

朴散華即ち如何に朴下亭 塚原 白里

朴下亭とは藤田湘子の家を朴の木好みの湘子が名付けたも

紫陽花や念力送る参観日 竹内 健

一年生になったわが子の父親参観日詠。ういういしいお父さん。窓外の紫陽花も一緒に子へ「念力」を送っている。

砂浜の海月の缺片ひとりごと 秋山 格雄

さみしい詩の一片のような句。主人公のひとりごとであり、海月のひとりごととも受けとれよう。孤独。

雷鳴や学生運動無き時代 島形英美子

いわれて気が付くと、今日の大学に学生運動などないと聞

今月の秀句

花石榴へレンケラーの忌を修す 有手 勉

厳密には石榴の花と花石榴とは違う。後者は八重咲、実がならないで専ら花を愉しむ。こゝは石榴の花を指すか。ヘレン・アダマス・ケラーは三重苦の中でいかに生きぬくか、サリバン先生の力を借り、八十八歳の高齢まで福祉に尽くした。その生涯が讃えられている。一九六八年六月一日が没日。石榴の花は清楚。その厚みから思慮深さも連想されよう。ぴったり付かないで、それとなく曖昧さが漂うのが私は巧いとみる。

の。湘子の随筆にいくたびも書かれている。作者も朴下亭を訪ねた日のことを懐かしんでいる。主の逝去によって忽ち忘られていく無常もこめて。人寄りを好み、人物評に終始した湘子の語らいはおもしろく、やがてさみしいものであった。

千年の泉の冷えの下る喉 関位 順平

今年大学を卒えた順平さんは詩人の田村隆一論を卒論にしたと聞いた。千年の泉の水がわずか百年のいのちの人の喉を下る。所詮人も泉の水と同じ自然の造形物。いのちは仮の宿である肉体にいつとき滞るもの。千年の泉の水も同じ。共感した。

朝焼や「もつとあしたはできるようにするか」と 福島留美子

五歳で餓死させられた船戸結愛ちゃんの大学ノートに書き残したおぼえたてのひらがなの文章ほど、純真さに溢れ、読み手の心にひびくことばを知らない。毎朝四時におき、ひらがなの練習をしたという。部屋には暖房も電燈もなかった。虐待の親をうらむことさえも知らない神さまのような気持に打たれ絶句する。留美子さんの慟哭の一句。

眼球を刻む夕立鉄格子 曦 終永

終永君はいよいよ名古屋の大学一年。大胆な句で、私には夕立を見つめる身体が鉄格子のはまった牢獄に感じられる。どのように生きていくか、当然迷いのさなか。その表白か。

かない。戦後三十年代(安保の時代)、来る日も来る日もデモに明け暮れた青春がいかに異様であったことか。そこに生きる実感があった。インターネット上のSNS(会員制サージャビスの一種)で問題視されている「つながる孤独」という気分が犯されるような余裕もなかった。雷鳴のあつけらんが効く。

本能の根元を洗う瀑布かな 竹岡みち子

人間の本能の根元など簡単に気付くことはできないが、瀑布の大音響によって一握りの本能に打ちのめされ、それでもすがりついている自分を見出したという。秀句と思う。

たたら場は灼熱の炎よ梅雨盛り 土屋 敏弘

梅雨どきの鋳物師の炉をそのまゝに詠む。格別の特徴はないが、場景に緊張感がある。

他に岳集からの推薦候補作を掲げる。

八月の陽は歪みたるまま沈む 安部 克詠
咄家の落ち近づける浴衣かな 岸元 忠義
句作りは十年初心蓮浮葉 遠藤 靖子
白南風や老猫の齢数へをり 加田クミ子
遠富士をどんと置きたる大夏炉 雨宮 桂子
永遠なるものは寂しき天道虫 小林さなえ
沖縄忌鎮まる海におじいおばあ 木村さとみ